



2013. 1. 1 7

No.175

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minakoginga@gmail.com

(連絡用)

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)

## 2013 寒中お見舞い申し上げます



2013. 1. 1 野幌森林公園近くからの初日の出

2013年が始まりました。文字通り厳しい寒さが続いています。みなさまは、お変わりありませんか？

インフルエンザが大流行しています。私も発熱に伴う悪寒、咳、喉の痛みで苦しみました。熱が治まったのでホッとしています。16日の天声人語に人は生涯に200回の風邪をひくとあり驚きでした。久しぶりの発熱で、体中が痛いし、こんなに辛いものかと長く病気で苦しんでいる人に心を寄せることが出来ました。

年末に選挙があり、脱原発の願いは投票に反映されず、正直がっかりしています。ドイツの環境を守る「緑の党」のような大同団結した政党が日本にもあったらいいのと思いました。原発を廃炉への道は今年はさらに厳しくなることが予想されますが、めげずに頑張りたいと思います。

昨年12月に泊原発の廃炉訴訟の口頭弁論があり、4人の原告が意見陳述をしました。特に子育て真っ最中のお二人の陳述は、子どもの未来のために原発はなくして欲しいと、自らの実践を語り感動しました。私にそんな覚悟があるのかと突きつけられたように思いました。銀河通信の読者はさまざまな考えを持っています。自分の意見を押しつけようとは思

いませんが、銀河通信で紹介した本が考えるきっかけになったら願っています。通信の読者は300人近くになりますが、泊原発の廃炉訴訟の原告になって下さった読者は31人にのぼります。賛同人も含めると50人近いと思います。少しは銀河通信が役に立てたのでしょうか？福島事故は、北海道でも起こりうることを教えてくださいました。原発はいのちと共存出来ないのです。

元旦、自宅から歩いて15分の野幌森林公園近くからの初日の出を見ました。まだ暗い朝、オレンジ色のご来光に思わず見とれました。希望あふれる2013年であって欲しいと祈りました。



1.6 銭函天狗山をパルクに

今年の7月で銀河通信が25周年になります。健康であればこそ続けてこれたのだと、改めて実感しています。家族にもさまざまなことがありました。夫も今年は還暦です。遅くまで授業の準備をしている姿に、私ももう少し通信に取り組みもうと気持ちを新たにしています。

秋に25周年記念の集いをささやかにでもやれたらいいなと思います。「企画するよ」と申しでて頂けると嬉しいです。



87歳の義母(樋口貞)が縫ったパッチワーク「元気の星」

## みな子の山旅日記

### コンパニオンレスキューを学ぶ

2012.12.15~16 黒岳



撮影・鈴木貞信さん

2012年12月15~16日に黒岳で講師と講師養成受講生による雪崩講習会がありました。

黒岳は積雪が多く厳しい寒さの中で積雪安定性テストやコ

ンパニオンレスキューの講習を実施しました。16日ゴンドラを降りてスキーを装着して、傾斜が30度前後のきつい登りを進むと、いよいよ訓練が始まりました。ビーコンで見つけても掘り出すのは大変。人形を使っての実践でしたが救出で終わりではありません。3S+ABCDEの救命処置があります。状況、安全、脊椎を確認し、気道、呼吸、循環、意識・障害部位の確認、風雪にさらされた環境からの開放までを短時間で行い、チームレスキューに引き継ぎます。

今年は各地で雪崩が多く発生しています。講習を終えてホテルで反省会を行っているとき、十勝岳連峰の三段山で、雪崩で一人意識不明の報が入りました。今回の講習会に参加しているメンバーと同じ山岳会の数人が現地に向かいましたが、意識が戻らず亡くなりました。三段山には私も何度も登っていますが、雪崩の知識の必要性を改めて感じました。

### ニセコで講師研修会

1.12~13 小笠原山荘

ニセコでの北海道雪崩研究会の講師研修は、小笠原さんの山荘をお借りして行われました。夕方まで16人の参加で、榊原さんを講師に学びました。(右写真)



コンパニオンレスキューのポイントは救助者の容体を悪化させないこと。安定した状態で組織レスキューに引き継ぐこと。装備はツェルト・シュラフカバー等は必携であること。使い捨てカイロは-10℃以下で使用開始しても発熱しないので、必ず暖かい場所で付けることが大事。プラティパスにお湯を入れて胸・背中に加温は非常に有効。シェルター内で加湿した空気を吸わせ呼吸を暖める事も有効。ネット担架はコンパクトで軽量等、より実践的な意見が多数出されました。

15分以内で救出が大事と言われてきたが、出来れば10分以内だと生存率は90パーセント近くに上が

る事が実証されているとの報告もありました。

雪崩発生の多い場所は、樹林帯の切れている場所が発生点になる事が多い。危険地点でザックのベルトを外す事の是非についてもさまざまな意見が出ました。重さでより深く埋没する危険性がある反面、ザックは雪崩時、浮力がつく場合があること。20kg以下であればしっかり装着した方が良いのではという意見もありました。装着している事により低体温防止の効果がある。背中を外傷から保護する効果がある等。臨機応変な対応が必要で、山行時はサブリーダーが先頭、リーダ



が最後尾でグループ全体を常に把握すること。消失点を他にわかりやすくするには、視認性の良い服装が有効等、たくさんの学びがあ

りました。

翌日は、山荘近くの小さな斜面を使って、積雪安定性テストとスノーマウントの作成実習。ショベルコンプレッションテストが有効ですが、新しいテストが普及しつつあり、今回、初めて拡大角柱テストと伝搬スノーソーテストを実施しました。



深さ25cmの層にスノーソーを入れた時、最後まですれなかったが、参考に雪面から80cmの深さの氷板の上にスノーソーを入れたときすれました。(右写真)

とても勉強になった研修会でした。

### 800mを残して下山 銭函天狗山 (536.7m)



写真提供 今田美知子さん

1月6日  
今年の初登山は銭函天狗山です。メンバーは12人。手稲金山から星置

川沿いの林道を歩き頂上を目差しました。マイナス10度、風が冷たい。9:50出発。林道を足首までのラッセルを交代しながら進むも、頂上まで800m地点で終了しました。ピークは踏めずとも小粒ながら堂々とした天狗山を眺望でき、足慣らしにもなり楽しかったです。

# 本 Books



## 原発報道 東京新聞はこう伝えた

東京新聞編集局編 東京新聞1800円

東京新聞の原発記事はネットでも評判でした。全国からの声に応じて出版されたのが本書です。

本書は「スクープと調査報道」「折々の報道と連載レベル7、福島作業員日誌」の二部構成で当時の記事を載せ、記事の縮小版もあり親切的な編集です。取材時の担当記者がコラムを書いている、この部分だけ抜き出して読むだけでも東電との攻防がリアルに伝わってきます。首相退任直後の菅さんのインタビューについての裏話が載っています。インタビュー後に原稿の確認を記者が読み上げて、表現の直しを求められたと語り、前総理が首都圏壊滅の危機感を持ったという認識を引き出したのです。常に素人の目線で取材してきたと語る記者たち。どの新聞もどこにも遠慮することなく真実を書いて欲しいです。

保安院は「都合のいい部分」のみ和訳し、公表していたことも判明しました。国会事故調が「人災」と断定したのは当然です。東電は全電源喪失だけではなく10メートル以上の津波も、水素爆発も敢えて想定を避けていたし、廃炉には建設よりも時間も費用もかかることも隠してきました。遂に「低汚染水 海に放出 1万トン最大で500倍」と報じたのです。この記事を読んで、近海の魚を食べるのが恐くなりました。

自分たちは特に変わった報道をしているという認識は持っていないが、当たり前のことを普通に報道するだけで、たまたま今の日本では突出した存在になってしまっていると田原記者が語っているのが印象的でした。反原発の立場を鮮明に打ち出しているのは、現場に任されているからだともあります。記事に臨場感があるのは現場を見て書いているからです。疑問に思ったことを、徹底的に取材しているので説得力があります。関心のあるところからでも読めるのもお勧めです。



## 孫文の机

司 修著 白水社 2200円+税

本書は「孫文の机」そのものの由来ではなく、著者と大野五郎の思い出話から三兄弟が辿った昭和の歴史を描いています。多数の作家・文化人が彼らと関わっています。2.26事件の現場に居合わせた記者・和田日出吉、「日本のランボー」と呼ばれた詩人・逸見猶吉、主体美術協会を結成した孤高の画家・大野五郎。

3人は兄弟で、栃木県谷中村の出身です。兄弟の父や祖父は谷中村の村長で資産家。鉱毒事件が起きたとき住民の側に立たなかった人で、後に廃村になりました。ジャーナリストとして活躍する和田日出吉は、谷中村を一刻も早く忘れ去ろうとしますが、決して忘れまいとする逸見猶吉。大野五郎だけが政治の嵐に呑（の）まれることなく、飄々（ひょうひょう）と生きました。

詩人の逸見猶吉は、父らの残した遺産を「資本家優先の国家ぐるみの谷中滅亡と関わると知って「苛烈な悪臭の周りにうなる金蠅」を感じ、徹底的に費消しようとしています。しかし、和田日出吉が「満州新聞」の社主になり、逸見猶吉も通信社駐在員として満洲に渡り変貌していきます。

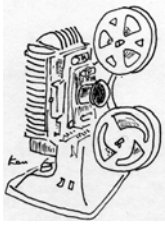
著者と大野五郎との会話が印象的です。父が死ぬときに残した遺言「決して土地は持つな」の言葉には、誰にもいえないもの、谷中村という原罪かなど。一番貧乏な大野五郎は、68歳で家付きの土地を買ったことを明かします。著者は、「孫文の机」という言葉と「遺言を破った」という言葉は大野五郎の人間性と深くつながっているように思ったと書いています。「孫文の机」を友人にやってしまったのも、持つなと言われたのに持った土地も、大野五郎の意識の底で、鉛のように重い問題を断ち切ったのだと。谷中村から逃げたり隠れたりするのではなく、谷中村と共に生きる道に立って生きた、ということだと親愛をこめて書いていて、大野五郎の人間性を浮き彫りにして共感しました。

あとがきに「未曾有の福島原発事故が発生してから1年半になろうとしている。国や東電の被害者への対応は、足尾鉱毒事件をなぞっているように感じてならない。明治に生まれ、大正、昭和を生きた人たちを書き終えて、『孫文の机』は昔のことではないと思った」とあり、日本は歴史から学んでいるだろうかと考えさせられました。

新田次郎・藤原正彦著の670ページの長編「孤愁 サウダーテ」も読みましたが紹介したいと思えなかったです。ポルトガル人外交官モラエスの生涯を描いた小説です。新田次郎の山岳小説に親しみを感じてきた人には違和感があるかもしれません。

購読料をありがとうございます(敬称略)  
2012.12.6~2013.1.17

芳賀孝郎・淳子(札幌市)カンパ含む 堀田真知子(札幌市)土岐由紀子(札幌市)佐々木純一(雨竜町)カンパ含む 伊藤泰弘(札幌市)倉田納(稚内市)カンパ含む 安田成男(札幌市)カンパ含む 津村靖代(札幌市)切手 合計 19,000円は印刷と送料に使わせて頂きます。ありがとうございます。



## レ・ミゼラブル

英・トム・フーパー監督



ヴィクトル・ユゴー原作は、中学生の頃夢中で読んだ記憶があります。

ミュージカルを映画化。19世紀前半のフランスが舞台です。たった一切れの

パンを盗んで19年の刑を受けて仮釈放されたジャン・バルジャン（ヒュー・ジャックマン）と追う警察官ジャベール（ラッセル・クロウ）の対決を軸に虐げられた民衆を描きます。

科白はなく、全くの吹き替えなしで歌うスクリーンに釘付けになりました。歌だけで心情が伝わってきました。フォンティーヌ役のアン・ハサウェイが劇中で歌う「夢やぶれて」は、この映画の最大の見どころです。初めて客に体を売った彼女が、絶望に打ちひしがれ声を振り絞るさまは圧巻でした。

ジャン・バルジャンがジャベールに追いつめられながら苦悩し、良心の狭間で揺れる心情も胸に響きました。

富裕層と貧困層の格差がまして、学生や市民が立ち上がります。明日への希望を高らかに歌う「民衆の歌」の合唱が現代にも響く民衆への讃歌のようでした。登場人物たちの歌唱力と表情で、心の変化が手にとるように分かり感動しました。

## 短信

★年末にホームページを開設しました。http://www13.plala.or.jp/minginga/パスワード pegasus 過去の通信も読

めます。年末に亡くなったベアテ・シロタさんは憲法草案を書いた女性です。11年前にインタビューした記事も載せました。憲法は日本の大事な宝です。機会がありましたら読んで下さると嬉しいです。



青空に舞う「ルンタ」は、チベット語で「風の馬」の意味。「祈りの経文」が空を駆け抜け、願いを天に届けてくれる。



林恭子さん（札幌市）難を転じる「南天」をデザイン 原発事故から廃炉に転じたいという気持ちをこめました。



伊藤久次郎さん（福岡県田川市）の版画 黒斑山からの浅間山

★昨年12月、ふたご座流星群を自宅の天窓から観察。夫は5回私は3回鮮明な流星群を見ました。願いを託しましたよ。

★夫が授業でドライアイスと実験道具を使って雪を降らせました。「樋口先生が魔法で雪を降らせた」と生徒が喜んだと、食卓の話題に。

★母の介護問題などもあり多難ですが、時々山に登ってリフレッシュしたいと思います。今年もご愛読をお願いします。

バイマー・ヤンジンさんはチベットの音楽、文化、習慣など紹介するため全国各地でコンサートを行っています。収益はチベットの子供たちに教育をと、ヤンジン小中学校を建設。多くの子ども達が学んでいます。http://yangjin.jp/

版画やイラスト等伊藤さん、林さんヤンジンさんの了解を得て掲載しています。

## 相馬看花 奪われた土地の記憶

松林要樹監督



東日本大震災で事故を起こした福島第一原子力発電所から20キロ圏内にある福島県南相馬市原町区下江井地区に迫るドキュメンタリー。4月3

日に支援物資を運ぶために現地入りした松林監督と友人が、そこで出会った南相馬市市議会議員の田中京子さんらと行動を共にする姿を映し出します。

題名はイラク取材中に亡くなったジャーナリスト橋田信介さんがあえて「走っている馬の上からでも、花という大事なものは見落とさない」と解釈し、相馬看花としたそうです。ここ相馬にしばらく物資が届かなかったのです。どれほど大変だったろうかと想像がつかます。信頼関係をつくっての撮影だったと語っています。

田中さんの夫から、2人が結婚式を挙げた神社の桜を撮影してほしいと頼まれます。カメラはまるで田中さんの家族の一員かのように、被災した人々の有りのままの姿をとらえます。桜が見事です。末永さんが原発設立当時の市議だったり、桑さんが原発の元安全管理者だったりして、彼らの言葉から地域と原発の一筋縄じゃない関係性も浮かび上がってきます。原発はないほうがいいと思っているのか、言葉で語ることがないので、何か物足りなさを感じるのには私だけなのでしょう？